

# JAF AE Newsletter



No. 18 (January 2006)

## 第18回全国大会 / 京都外国語大学にて開催

### プログラム

日時：2005年12月3日（土）10:00 - 17:30  
 場所：京都外国語大学1号館7階 171教室  
 大会総合司会：加藤三保子（豊橋技術科学大学）  
 10:00 開会の辞：相川真佐夫（京都外国語短大）  
 会場校挨拶：小野隆啓（京都外国語大学）  
 会長挨拶：本名信行（青山学院大学）  
 10:10 - 11:30  
 特別講演：張武昌（国立台湾師範大学）  
 “Primary English Education in Taiwan:  
 The Status Quo and  
 the Results of a Recent Survey”  
 11:30 - 12:00 会員総会  
 12:00 - 13:30 昼食休憩  
 13:30 - 15:00 研究発表  
 司会：徳地真二（宮崎産業経営大学）  
 1. Derrick Nault（関西学院大学）  
 “Outsourcing English: Are Indian Call Centers a  
 Form of Linguistic Imperialism?”  
 2. 藤田尚己（The University of Essex MA in  
 Applied Linguistics 修了）  
 「日本と中国の大学生の英語教育の  
 実態についての比較」  
 3. Z. N. Patil（Central Institute of English and  
 Foreign Languages, Hyderabad, India）  
 “Twice Born Languages:  
 a Perspective on Some Asian Englishes”  
 15:00 - 15:30 休憩  
 15:30 - 17:30  
 シンポジウム「アジア英語とESP」  
 コーディネータ：  
 竹下裕子（東洋英和女学院大学）

発題者：本名信行（青山学院大学）  
 田中慎也（桜美林大学）  
 猿橋順子（玉川大学）  
 閉会の辞：津田早苗（東海学園大学）  
 18:00 懇親会（京都外国語大学11号館ラウンジ）

### JAF AE全国大会レビュー

津田早苗（東海学園大学）

第18回大会は相川真佐夫理事を実行委員長に、12月3日（土）京都外国語大学において開催され、次の特別講演、研究発表、シンポジウムが行われた。

国立台湾師範大学 Dr. Vincent Chang による特別講演 “Primary English Education in Taiwan: The Status Quo and the Results of a Recent Survey” は台湾の教育事情に詳しい相川理事のご尽力のおかげで実現した。

講演の中で最も興味をひかれた小学校教員養成についてである。台湾では1999年に2001年までに3,300人の教員を養成する小学校英語教師養成プログラムを発足した。45,495人が応募し3,536人が養成対象となった。英語力の不足する研修者には240時間の言語プログラムが課され、すべての研修者に120時間の教育法が教えられた。この研修の後に小学校教員になるための教育が実施され、1年間の小学校におけるインターンシップが実施された。この課程を修了した1,922人のうち実際に現在小学校で教えているのは1,476人である。このような総合的な教員養成プログラムを実施した台湾政府の姿勢に感服すると同時に、日本でも小学校における英語教育を実施するのであれば教員養成から考えるべきであると思った。

午後には3件の研究発表 Derrick Nault 氏 “Are Indian Call Centers a Form of Linguistic

Imperialism?」、藤田尚己氏「日本と中国の大学生の英語教育の実態についての比較」、Z.N. Patil 氏“Twice Born Languages: a Perspective on Some Asian Englishes”が行われた。Nault 氏はインドにおける business outsourcing が必ずしもインド人の identity やインド英語を変容しているとはいえないと指摘した。藤田氏はアンケート調査から日本人学生の英語習得への熱意が中国人学生にくらべ欠けていると指摘した。また、Patil 氏はアジア英語について、1)英語の拡大と土着化 2)土着化された英語への態度 3)新英語の理解度 4)これらの語用論的側面 5)これらの英語を教えることの意味について論じた。イデオロギーではなく現実 に即した Nault 氏の分析と Patil 氏の包括的なアジア英語の分析と語用論的な研究の必要性の指摘は興味深いと感じた。

シンポジウム「アジア英語と ESP」コーディネータ：竹下裕子氏、発題者：本名信行氏、田中慎也氏、猿橋順子氏においては、本名氏と猿橋氏による言語監査の理念およびそのアジア英語への援用、田中氏の日本の言語政策と ESP の議論が展開された。藤田氏の研究発表で指摘されたように、日本における英語学習熱はアジア近隣諸国の熱狂的態度とは異なり沈静化しているように一見見えるが、本名氏は言語監査の観点から、日本国内におけるコミュニケーションのツールとしての英語の需要は潜在的にはまだまだ掘り起こせるはずであることを指摘した。確かに、どこで英語が使われるか、学習者はどのような状況で英語を使うかの調査がなされなければ目的にかなった教育も不可能であると納得した。

会場には Pax Mundi per Linguas (ことばを通じて平和を)と書かれた壁画が飾られていたが本学会も研究活動を通じアジアの国々の相互理解を深めていきたいと感じた。

## 特別講演レビュー

### “Primary English Education in Taiwan: The Status Quo

#### and the Results of a Recent Survey”

相川真佐夫 (京都外国語短期大学)

今回の大会には、国立台湾師範大学文学院院长で、英語系教授である Dr. Vincent Chang 氏 (張武

昌) をゲストに招いた。Chang 氏は、JAF AE の第3回海外スタディツアー (2004 年) の際にも、お世話をいただき、ツアーに参加した JAF AE メンバーには1年半ぶりの再会となった。Chang 氏は、台湾教育部の英語教育政策における顧問的存在であり、ここ数年、多くの政策に関わってきた。その立場から、近年、台湾の英語教育界を激動させている小学校の英語教育の現状と課題について特別に講演をいただいた。



Dr. Vincent Chang (張武昌教授)

講演の前半では、小学校における英語教育の概説をしていただいた。導入の2年前に当たる1999年から行われた the Primary School English Teacher Training Program (PSETTP)に始まり、2001年の小学校5年生からの英語の導入、2005年からの小学校3年開始への早期化まで、一連の流れを概説いただいた。これらの政策を通時的に伺うと、台湾教育部の行動力と政策決定の迅速さ、高等教育機関の組織的な協力体制、そして台湾人の英語教育に対する熱意を感じ得る。

しかし、光のあるところには陰もつきもので、次のような問題点を挙げられた。(1) 就学前に英語を学習し始める児童もあり、小学生児童間の能力差が激しい。これには、家庭環境や家庭背景などが影響している。(2) 2001年から第5学年を開始学年として英語教育を導入させたが、25の県市のうち6つの地方自治体だけがそれに従い、他の県市はさらに早い学年から始めている(2004年の教育部の現状調査による)。また同じ県市内でも学校間によって方法が異なるので、カリキュラムが不揃いとなっている。(3)1999年から2年を費やした the Primary School English Teacher Training Program (PSETTP)は、最終的に必要とする教員数

を確保できず、さらに多面的な補充政策を施している。しかし資格のある教員が不足しており、とくに僻地、離島などがその犠牲となっている。(4)「英語学習は早ければ早いほどよい」という考えを持つ保護者の圧力や、多くの地方自治体が早くから始めているという事実から、教育部は2005年から第3学年まで開始学年を前倒しし、英語教育を始めることにした。これが教員不足をさらに深刻にさせている。(5)教員の補充をする目的もあり、母語話者教師を採用しようとしているが、厳しい資格条件を設定しているため数が少ない。2004年にはカナダから5名、2005年には16名だけである。(6)国語能力の低下が指摘されるようになってきている。同時に、過去に比べて帰属意識の問題で中国文化や中国国民に関するものに興味を示さなくなった。

後半では、Chang氏が34名の「種子教師」に対して行ったアンケート調査により、クラスサイズや週時間数などの現況、教材や教授方法、評価方法、国レベルでの評価システムや習熟度別クラス編成についての意見、教員の現状などを報告していただいた。「種子教師」とは、自身も教壇に立ちながら、教師を指導する能力を認定された教師であり、学校または一定の学区内にひとりが配置されている。この教師がその学校・学区内の現状を一番把握していると考えられる。

全ての調査項目をレビューすることはできないが、とくに印象的であった小学校英語と全国統一実力テストのあり方についての問題を取り上げる。従来から台湾の英語教育において、テストの生徒・児童、教師、保護者に対する影響力は絶大であり、テストを中心軸として指導や学習が行われてきた。実力テストが行われると、経済的余裕のある家庭は子供を塾に通わせ、さらに児童間の学力や英語に対する興味に差が生じ、これまでの中学・高校での英語教育の悪影響までが早期化されることになる。Chang氏は、そのようなテストのnegative backwashと、テストそのものが小学校の英語教育の目的となることを恐れている。

しかし、一方で教育効果を測定するシステムも必要である。よって、全国レベルの実力テストの導入の是非については常に議論的になり、研究者や教育政策決定者の間で意見が二分されている。

現在、Chang氏の調査によると、約6割の地方自治体が自治体レベルの実力テストを実施している。実質、教室内の評価はポートフォリオなどを取り入れかなり多面的な評価方法を取り入れてはいるが、教育政策上の効果を測るためのテストそのものが悪影響を与えるというジレンマを解消するのは容易ではないようである。ちなみに、地方の統一テストは、リスニングとスピーキング重視したものを実施しているケースが46%、リーディング・ライティング重視が27%、4技能を統合しているものが27%ということであった。

いくつもの課題を抱えている台湾の小学校英語であるが、Chang氏は現場の教師、研究者が教育政策者と一緒に解決策に取り組む責任を果たさねばならないと言うことを強く主張し、講演が締めくくられた。

## シ ン ポ ジ ウ ム

### 「アジア英語とESP」

竹下裕子(東洋英和女学院大学)

第18回全国大会の午後の後半のシンポジウムは、本学会の新しい試みともいえる、アジア英語とESPの関連を考えることをテーマとした。発題者には、青山学院大学国際政治経済学部教授・本学会会長の本名信行氏、桜美林大学文学部・国際学研究科教授の田中慎也氏、青山学院大学総合研究所特別研究員および玉川大学文学部非常勤講師の猿橋順子氏の3名を迎え、東洋英和女学院大学国際社会学部教授の竹下裕子がコーディネータを務めた。

まず、竹下より、本シンポジウムの意義と方向性を提示した。すなわち、現在、文部科学省が進めている「英語が使える日本人」の育成のための行動計画のなかでも明らかにされているとおり、国が大学の英語教育に対して求めるものは、仕事で英語が使える人材の育成である。大学生は、それぞれの専門分野で勉学を積み、やがて社会に巣立っていく。就職先などにおいて大学における学びを活かして活躍することをめざすとき、その分野における活動を日本語のみならず英語によっても営む力を備えていれば、その人の言語活動の幅はさらに広がり、国内外において活躍することが

できる。したがって、小学校あるいは中学校の英語導入期のEGP (English for General Purposes) 以降、学習が進み、人間的に成長し、学習の専門度が増すに従って、求めるべき英語力もまた、ESP (English for Specific Purposes) の度合いを増すはずである。また、国際的な場面において、日本人とアジアの人々が遭遇し、協働する場面がますます増えていくことを考えれば、そのような英語力がアジア人との間の国際コミュニケーションの場面で活かされる可能性が高いという観点から考えると、アジア英語と ESP との関連において、今後の日本人の英語による言語活動を一考することには大いに意義が認められるのである。

本名氏は「言語監査論の視点から」というタイトルのもと、ESP を職業上の実利英語あるいは職業人の英語学習には欠かせないと同時に、学校の英語教育でも有効な概念であると定義し、さらにこれを EAP (English for Academic Purposes) と EOP (English for Occupational Purposes) に分類した上で、特に後者をさらに、生産管理やマーケティングなどを対象とした EPP (English for Professional Purposes) と、接客やセールスなどを対象とした EVP (English for Vocational Purposes) に分けた上で、このような英語力が企業にとって大変に重要であることを強調した。その上で、企業が言語的体力を備えて国際ビジネスに携わるためには、(1) 企業等の言語関連ニーズを分析し、(2) それに対応する現有能力を評価し、(3) 必要に応じて改善策を提示し、(4) そのプログラムを監督し、(5) その成果を審査する、という任務を担う言語監査が、会計監査と同様に重要となることを訴えた。



田中氏は、大学の英語教育の歴史や社会のさまざまな変化のなかで、今後、大学に求められる英語教育は、これまでの一般語学の英語担当教員を

中心とした英語教育では足りず、一般語学の英語担当教員と専門教員集団とが連携・協力して「専門カリキュラム」のなかに、「目的別英語教育 (ESP)」を取り込む努力と工夫をする必要があるということを主張した。すなわち、地球社会化 (グローバル化) や情報社会化、価値観やライフスタイルの変化と多様化、少子高齢化、生涯学習社会化への移行等、社会が大きく変化していくなか、日本の企業においても、終身雇用や年功序列という慣行に替わって、業績主義や成果主義と取り入れる人事考課が採用されるに至り、ますます専門知識、専門技能を持った、即戦力として活用できる人材が求められている。そのため、従来、英語教育を担当してきた人文系出身の教員だけでは、専門別英語力養成という任務を達成することはできず、国際化に対応する人材の育成は不可能であるとの警告を発した。



最後に、猿橋氏は、本名氏がその重要性を主張した言語監査論と ESP との関連において、青山学院大学総合研究所、e ラーニング人材育成研究センター (eLPCO) が研究を進める実践教育コンテンツ分野のひとつである、国際協働コミュニケーション研究部会のうちの言語監査分科会の活動を中心に、具体的な事例を提示した。日本企業の英語研修が ESP 志向であるだけでなく、アジア地域におけるビジネスの場面での ESP への関心が高まっていることをふまえ、ESP や言語監査論、そしてこれに重要な役割を果たすニーズ分析などは、欧米を中心に開発、発信されたものであり、日本の現状にそのまま適応するには不具合があるため、それぞれの技法が、各々の所属する組織、部署、関係集団間で実際に受容可能かを考慮し、それを実際に実践した上で修正案を提示するといったパイロットスタディ的な研究実践に取り組む青山学

院大学の研究の意義を明らかにした。

ESP という概念そのものは新しいものではない。しかし、冒頭でも述べたとおり、アジア英語と ESP という括りのなかで本学会がこのテーマに取り組むのは初めてのことであった。私たちを取り巻く日本と世界の変化しつつある状況のなかで、日本人とアジア人にとって、そして日本人と世界各地の人々にとっても、より豊かな英語による言語活動を可能なものとするため、日本のさまざまな組織の英語力を高めるために、そしてその未来の担い手となる大学生の英語教育に携わる者の視点から、今後とも、アジア英語と ESP の研究を深めていくことが、本学会に期待される使命のひとつであろう。

## 新会員の学会感想

三原伸剛 (開智中学校・高等学校教諭)

このたび初めて日本「アジア英語」学会の全国大会に出席させていただき、アジア各国で行われている英語教育の実態と、ご出席の先生方の旺盛な研究姿勢を目の当たりにし、とても強い興奮を覚えました。

その興奮とは知識を追求する欲求とも、教育を実践する欲求とも言えるかと思いますが、その時すぐにでも一からシラバスを作成し直し、教室で新たな視点で実践し直したいという強い衝動でありました。

日常、教壇では進学校であるがゆえに、大学受験指導を中心としたものに偏りがちであります。英語はコミュニケーションツールであるという本名先生のご指摘により、改めて英語教育の原点に立ち返ることができた実り多い大会でありました。

機会を見つけては、アジア各国の英語の大学入試問題を集め、各国がどのような次代を担う人材を育ててゆきたいと考えているのか、研究を深めたいと考えております。

## 2005 年 タイ国際交流研修

竹下裕子 (東洋英和女学院大学)

2005 年 8 月 28 日、会員を乗せた 3 機の飛行機が次々とバンコクに降り立った。関空から橋内氏、中部国際空港から津田氏とラファイエ氏、成田からは本名会長、牛山氏、大和田氏、鈴木氏、竹下

の計 8 名がバンコク国際空港で無事、合流した。Twin Towers Hotel にて夕食後、翌日からのハードスケジュールに備え、夜遊びもせずに就寝。続く 3 日間の行程は次のとおりであった。

29 日 (月) 朝食後、トンブリー・ラジャバット大学 (Dhomburi Rajchabhat University) 主催のセミナー“English Language Teaching in Thailand and Japan”に参加。昼食後、学内見学。のち、会長と竹下は国会議員との面会へ、残りの会員は市内観光。夜、大学関係者とチャオプラヤー川のディナークルーズを楽しみながら懇談。

30 日 (火) 朝食後、聖ジョセフ修道学校 (St. Joseph Convent School) を訪問、教員との懇談と授業参観、および校内見学。午後、ポティサーン学校 (Phothisarn School) を訪問、同じく教員との懇談と授業参観および校内見学。

31 日 (水) 朝食後、チュラロンコン大学ラングーージンSTITUTE (Chulalongkorn University Language Institute: CULI) を表敬訪問、教員との懇談と授業参観。キャンパス内インターナショナルハウスで教員と昼食後、自由行動を経て鈴木会員と竹下を残し、6 名が 3 機に分乗してバンコク発、翌 1 日に無事帰国。



St. Joseph Convent School の淑女たち

29 日のセミナーは、我々の渡泰に合わせてトンブリーが企画して下さったもので、大学関係者に加え、中高の教員が研修目的で参加した。本名会長がアジアの英語事情とアジア英語の重要性に関する講演を、竹下が日泰コミュニケーションに関する研究発表をした。トンブリーからは、タイの英語教育に関する講演が行なわれた。我々全員が主賓扱いを受け、ひとりずつ、記念品を授与される場面までであった。ラジャバットとは、旧教育大学の総称で、今は総合大学となっているが、のち

評者：伊東弥香（東海大学）

に訪問した名門チュラロンコン大学とは規模も雰囲気も異なる。

翌日の2校はいずれも、先進的な英語教育で有名である。聖ジョセフは、女子の小中高で、カトリックのシスターのもと、良家の女子が徹しく熱心な教育を受けている。日本人の留学生にも会った。ポティサーンは普通科と英語科を備えた大規模な小中高で、英語科はネイティブスピーカーの教員を多く抱え、徹底したバイリンガル教育を実施している。

代々、王家の子女が学ぶことで有名なチュラロンコン大学の CULI は、約 100 名の英語教員の大集団である。4 つの教育機関への訪問は全て、CULI のスパット教授の尽力により実現したものであった。

短期間ではあったが、行く先々で歓待され、タイ人と英語によるコミュニケーションを図り、タイ文化に触れ、驚き、感動し、時には呆れ、また共感する旅であった。この国際交流研修で得たいくつかの小さなご縁を、学会の今後の発展に活かしたいと祈念する。



Phothisarn School では英語劇の上演でおもてなしを受けた

## Book Review



『アジアの視点で  
英語を考える』

祖慶 壽子著

朝日出版社 2005 年

ISBN: 4-255-00338-6

価格 2,520 円(税込)

本書の特徴は、日本語教授の専門家として大学で教鞭を執る筆者が、英語学習者の一人として文法や発音に「がんじがらめ」の日本の英語について考え直し、アジアの英語に学ぶことを提唱していることにあるだろう。JAF AE 会員にはすでに馴染みのある内容も多いが、英語教育の専門書とは一味違ったアプローチによる本であり、JAF AE 会員による文献も多数引用、紹介されているので、アジアの英語について初めて学ぶ学生などには参考書としても有用である。とくに付録 CD (スクリプト付) にアジア国 (日本を除く、インドなど 11 ヶ国) の 18 人の英語 (自己紹介) を収録し、それぞれの英語を聴きながら日本人の英語について考えるように工夫されている点が興味深い。

本書を構成する全 6 章のタイトルはそれぞれ、「日本人と英語は相性が悪いのか?」「英語の歩み—国際語としての英語、世界英語としての英語—」「英語圏の英語」「公用語として英語を採用している国」「外国語として英語を使用する国々」「英語教育に関して」である。筆者は英語を自己表現の手と捉え、英語母語話者の立場からではなく、アジア各国における英語との戦いの歴史を紹介している。具体的には、英語を公用語、あるいは事実上英語が公用語の機能を果たしている国としてインド、パキスタン、バングラデッシュ、スリランカ、シンガポール、マレーシア、フィリピンを、また、外国語として使用する国の例としてタイ、ラオス、ベトナム、インドネシア、中国、韓国、日本を取り上げながら、各国の言語事情・英語事情や英語使用の状況などの概略を述べている。筆者はパキスタン人、スリランカ人へのインタビュー調査や、スペクトログラフを利用した英語変種音の比較調査による発音分析を行っているが、本書ではそれらの結果にも簡単に触れながら、付録 CD を利用することで実際に彼らの英語を聴く機会を読者に与えてくれている。

なお、英語圏の英語については、英国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの各英語の特徴と、各国の発音や綴りにおける変種の多様性や、移民の流入による多言語・多文化の現況について言及している。これは日本の英語教育において英語圏の英語だけを正統なものとする

る考え方に対して筆者が疑問を呈しているためであるが、JAF AE 会員の視点とも共通するものであろう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『日本の小学校英語を考える  
アジアの視点からの  
検証と提言』

バトラー後藤 裕子著  
三省堂 2005 年  
ISBN: 4-385-36238-6  
価格 2,400 円＋税



評者：加賀田哲也  
(大阪商業大学)

ここ数年、書店の語学教育コーナーは、小学校英語教育の理論や実践に関する書物で溢れかえっているが、その中でも本書は韓国・台湾での事例をもとに多角的に小学校英語教育について論じ、著者の考え・提言が明確に記されている点においては希に見る良書である。

第 1 章では、我が国での小学校英語教育導入の経緯や現状、第 2 章では韓国・台湾での著者のフィールドワークやアンケート調査に基づいて、両国の現状について詳細な情報が提供されている。第 3 章では、韓国・台湾に共通の課題（具体的には、導入時期の問題、指導内容と教授法の問題、指導者の問題、評価の問題）についてかなり掘り下げて議論がなされている。これらは、まさに我が国の英語教育が直面している問題でもある。そして、最終章の第 4 章では、これからの我が国での小学校英語教育の在り方について明確に著者の提言がなされている。

目下、我が国の小学校英語教育の最大の課題は誰が教えるかという問題であろうが、native speaker に過剰に依存することなく、non-native speaker の教師だけでも十分授業が行える体制を構築する必要性が説かれている。そのためアジアの教育文化に即した「ポスト・ネイティブ・モデル」の提示は大変示唆に富むものである。Native speaker の英語の習得を最終目標におかない、母語を無条件に排除するのではなく、状況に応じて上手に利用する、インプットの充実を図り、アウトプットを急がせない、など 5 つの項目から

成る (256 頁)。非常に具体的に説得力のあるモデルである。

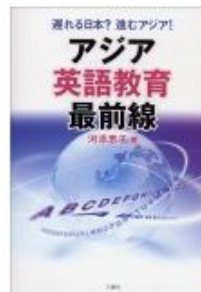
また、我が国の英語教育を考えるにあたり、アジアでの教育実践にもっと真剣に目を向ける必要性があることを著者は訴える。我が国の外国語教育においては従来、欧米（特に英語圏）からの輸入理論に基づいて議論される傾向が強いように感じられるが、「...アジアでの比較研究を始めてみて、文化教育的背景の違いなどを超えて、各国の教師が同じような悩みを抱え、言語政策上も各国が似たような難問につきあっていることがわかってきた。さらに、こうした問題点の解決のヒントは、英語圏ではなく、むしろ隣国に多くあるのではないか」という思いを強く抱くようになってきた」(271 頁)と著者も述べるように、今後はこれまで以上に東アジアでの実践・研究を視野に入れ、各国が相互に情報交換していきながら、我が国も国家として確固とした言語教育政策を打ち立てる必要があると痛感した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『アジア英語教育最前線—  
遅れる日本?進むアジア!』

河添 恵子著  
三修社 2005 年

ISBN: 4-384-04066-0  
価格：2,310 円（税込）



評者：寺島隆吉 (岐阜大学)

最近、アジア英語に関する出版が相継いでいる。古くは『事典、アジアの最新英語事情』（本名信行・編、大修館書店、2002）が出ているし、昨年には『韓国の英語教育政策』（河合忠仁、関西大学出版部、2004）、今年になってから『アジア英語教育最前線』（河添恵子、三修社、2005 年 4 月）、『アジアの視点で英語を考える』（祖慶壽子、朝日出版社、2005 年 7 月）、『日本の小学校英語を考える：アジアの視点からの検証と提言』（バトラー後藤裕子、三省堂、2005 年 8 月）と 3 冊も立て続けにアジア関係の本が出版された。

バトラー後藤氏のものは「アジアの視点」と言っても、そこで取り上げられているのは韓国と台湾だけである。もちろん「外国語としての英語」

という点で日本と比較するにはシンガポールやフィリピンを取り上げては仕方がないので、これはこれで意味があるとも言える。また祖慶氏のものにはデータが本名(編)の引用だったりして必ずしも新しくはないが様々な生のアジア英語を録音したCDを添付してあるので、その意味で面白い企画と言えよう。しかし『アジア英語教育最前線』は河添氏が自分の足で取材した報告がたっぷりと載せられているという点で極めてユニークな本である。

本書は「英語急進派の国」(中国、韓国、台湾)、「バイリンガルの国」(インド、シンガポール、フィリピンなど)、「英語教育新潮流の国」(タイ、ベトナム、モンゴルなど)、「教育発展途上国」(カンボジア、ネパール、ラオス)の4部に分かれているが、総285頁のうち163頁までが「英語急進派の国」(中国、韓国、台湾)に割かれている。したがって河合氏やバトラー後藤氏のものと比較しながら読むと新しい発見があって私には非常に興味深いものがあった。しかも先述の通り、河添氏が実際に訪れて取材した学校の時間割やインタビュー記事などが載せられていて非常に臨場感に富む。

しかし気になったのは、訪問先のほとんどが一部の富裕層だけが通うエリート校ばかりで、しかもその学校のカリキュラムと比較して「遅れる日本?進むアジア!」という意識をかき立てる全体のトーン(書き方)だった。ひょっとして、これは氏の本意ではなく「売らんかな」を目指す出版社・編集者の意図に押し切られた結果かも知れない。というのは随所に各国が抱える「明」の部分だけでなく「暗」の部分もさりげなく書き込まれているからである。とにかく手にしてみる価値のある本である。

- ・言語政策や社会言語学の基本的なキーワードをわかりやすく解説
- ・外国人や日本語教育に関する地域・学校・企業の現況や、国・自治体の施策を多面的に説明
- ・在日外国人コミュニティやマイノリティの現状・課題を提示
- ・バラエティに富んだ国内外のさまざまな日本語の世界を紹介



『外来語の社会学』  
 —隠語化する  
 コミュニケーション』  
 広島修道大学学術選書  
 山田雄一郎著  
 春風社 2005年  
 ISBN4-861-10050-X  
 価格:2,940円(税込)

現代の日本語は<大衆化>と<隠語化>という逆向き力がせめぎあっている。氾濫するカタカナ語に、私たちはどう対処すればよいのか。森鷗外から綿矢りさまで、小説の会話文から外来語の姿を追う。

## 事務局からのお知らせ

### 1. 理事の任期について

理事会で「理事の任期は連続5期までとする」ことが了承されました。任期は理事選挙を開始した2000年から数えることとしますので、現在で3期目です。次の理事選挙から、投票の便宜上、被選挙人名簿上の現理事の氏名の横には任期数を明記します。

### 2. 第4期(2006年4月—2008年3月)理事の選挙理事選挙について

送り状でご案内の通り、第4期理事選挙を実施致します。投票用紙(○をつけた名簿)をまず薄い茶封筒に入れ、それを同封の返信用封筒に入れて、同封の封筒(宛名ラベル切手貼付済)にて2月28日(火)(必着)までに選挙事務局までお送りください。

### 3. 2006年度研究助成プログラム

アジア英語に関する研究を振興・奨励するために、会員に対する研究助成を2006年度も引き続いておこないます。申請期間は、2006年1月1日

## 新 刊 案 内



『事典 日本の多言語社会』  
 真田信治・庄司博史編  
 岩波書店 2005年  
 ISBN 4-00-080305-0  
 価格:3,600円+税



(土)から1月31日(月)(消印有効)です。申請書及びプログラム規則は現在も学会のURLからダウンロードできます。なお、審査は5名の審査委員による匿名審査でおこなわれます。

(URL: <http://www.jafae.org/grantpage.htm>)

#### 4. ウェブについて

ウェブのURLが変更されました。新しいURLは次の通りです。<http://www.jafae.org/>

#### 5. 10周年記念

2006年夏から2007年冬まで4回に分けて10周年記念事業を実施することになりました。2005年12月時点の案では、外国の研究者の招聘事業や出版事業の他、別紙にご案内しておりますESSCなどを計画しております。

#### 6. 住所変更について

学会からの送付物にはメール便を利用しています。住所変更届けを郵便局に提出してあっても、メール便は転送されません。住所に変更がありましたら、事務局までご一報願います。

#### 7. モノグラフシリーズ第4号刊行のお知らせ

12月上旬にモノグラフシリーズ第4号が刊行されました。モノグラフシリーズは購入希望者のみに販売しております。ご購入を希望される方は、事務局までご連絡ください。

価格は、第1号が1部600円、第2号と第3号と第4号は1部500円です。モノグラフシリーズ所載論文のタイトルは学会のウェブに掲載しています。

<http://www.jafae.org/kiyoumokuji05.htm>

#### 8. 海外研修旅行について

2006年度の海外研修旅行の詳細はまだ決まっておりませんが、決まり次第、連絡致します。

#### 9. 第19回全国大会について

第19回全国大会は2006年7月1日(土)に青山学院女子短期大学(東京都渋谷区渋谷)にて開催致します。大会実行委員長は同大学の湯本久美子会員です。

#### 第19回全国大会研究発表者募集

第19回全国大会(2006年7月1日(土)、青山学院女子短期大学)で研究発表を希望される方は、要旨(日・英どちらか)をWORDで1枚にまとめ、4月28日(金)までに大会担当の榎木蘭理事まで電子メールにてお送りください。  
[hnenokizono@yahoo.co.jp](mailto:hnenokizono@yahoo.co.jp)

### CALL FOR PAPERS for the 19<sup>th</sup> National Conference on July 1st, 2006 at Aoyama Gakuin Women's Junior College

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is accepted only by e-mail. Please write a 1-page abstract with MS WORD and e-mail it to Professor Enokizono at [[hnenokizono@yahoo.co.jp](mailto:hnenokizono@yahoo.co.jp)]. The deadline is Friday, April 28th, 2006.

### 会計担当理事より

今年度の会費を納めていない方は納入方お願い致します。

会費は、  
一般会員 5,000 円  
学生会員 3,000 円

郵便振込先は、

加入者名：日本「アジア英語」学会

口座番号：00280-8-3239 です。

お問い合わせは、会計担当の河原理事

([tokawahara@m2.spacelan.ne.jp](mailto:tokawahara@m2.spacelan.ne.jp))までお願いします。

### ニューズレター編集担当より

今回のJAF AE ニューズレター19号は、7月下旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。

自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちのあなた。どうかこの機会を通じてシェアして下さい。毎号、3件以上を目標に集めたいと思います。ご協力お願い致します。

書いてみようというご意志がありましたら、6月下旬までに編集担当(相川, [aikawa@nnc.or.jp](mailto:aikawa@nnc.or.jp))までお知らせください。

### 国際会議情報(アジア周辺)

#### ELTAI 37th Annual Conference

"The English Curriculum: Empowerment through Spoken English"

Date: February 3-4, 2006

Place: Chennai, Tamilnadu, South India

Contact: S. Rajagopalan ELTAI, 17, Muthalamman  
Koil Street, West Mambalam, Chennai-600 033  
India, Tel. 90-44-26443191,  
E-mail: elta-india@yahoo.co.in  
Website: <http://www.eltai.org>

**2006 International Conference and  
Workshop on TEFL and Applied Linguistics,  
"Language Teaching in the 21st Century:  
Trends, Policy, and Needs," Taiwan.**

**Date:** March 10-11, 2006

**Place:** Ming Chuan University

Contact: Teresa Hsieh, Academic Affairs Project  
Manager, Department of Applied English, Ming  
Chuan University, 5 Te-Ming Rd., Ta-Tung Village,  
Kuei-Shan, Taoyuan County, Taiwan, R.O.C.  
Tel. 886-3-3507001 ext. 3211-3213  
Fax 886-3-359-3870, E-mail [hhj@mcu.edu.tw](mailto:hhj@mcu.edu.tw)  
Website: [http://www.mcu.edu.tw-department-app-  
Lang-english-call2005.htm](http://www.mcu.edu.tw-department-app-<br/>Lang-english-call2005.htm)

**2006 International Conference on English  
Instruction and Assessment,**

**Date:** April 22-23, 2006

**Place:** National Chung Cheng University, Chiayi,  
Taiwan

Contact: Ms. Tang, Department of Foreign  
Languages & Literature, National Chung Cheng  
University, 168 University Rd., Min-Hsiung Chiayi,  
621, Taiwan, R.O.C.  
Tel. 886-5-2721108  
Fax 886-5-2720495, E-mail: [admada@ccu.edu.tw](mailto:admada@ccu.edu.tw)  
Website: <http://www.ccunix.ccu.edu.tw/~flcccu/>

**The Korea Association of Teachers of English,  
"Beyond the Horizon: Extending the  
Paradigm of TEFL,"**

**Date:** June 23-24, 2006

**Place:** Hanyang University, Seoul, Korea

Contact: Byung-Kyoo Ahn, Conference Chair/  
Professor, Dept. of English Education, College of  
Education, Chonnam National University, 300  
Yongbong-dong, Buk-gu, Gwangju 500-757,

Tel. 82-62-530-2438, E-mail [KATE2006@jnu.ac.kr](mailto:KATE2006@jnu.ac.kr)  
<http://www.kate.or.kr/main/conference/2006/>

**The 11th Pan-Pacific Association of Applied  
Linguistics Conference, Chuncheon, Korea.**

**Date:** July 28-30, 2006

**Place:** Kangwon National University

Contact: Nak Seung Baek, Professor, Dept. of  
English, Kangwon National University, Chuncheon,  
Kangwon-do, Korea 200-701,  
Tel. 82-33-250-8152  
E-mail: [paalkorea@yahoo.co.kr](mailto:paalkorea@yahoo.co.kr)  
Proposal Deadline: Feb-28-2006.  
Website: <http://paal.or.kr>

編集後記:

京都大会は行楽シーズンを避けたつもりでしたが、  
シーズン終盤ぎりぎりだったようです。まだ行楽客  
が押し寄せていました。学会の明るく日、ゲストの  
先生を清水寺周辺と高台寺にご案内しました。小雨  
の降る京都の紅葉、私も初体験でしたが、見事な紅  
葉に感激です。私も京都検定を受けてみようかな。  
「日本に京都があって良かった。」

2006年1月15日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

発行 (有)タナカ企画

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

学会ホームページ:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

**Prof. Hiroko Tina Tajima**

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525

JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: [tina2@gol.com](mailto:tina2@gol.com)

JAF AE's homepage:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:  
00280-8-3239